

PLACE OF HOPE

難民の  
ものがたり展



ブックリスト

このブックリストでは、さまざまな立場の方々が、  
一冊の本への思いを自らの言葉で語ってくださいました。  
「難民のものがたり」を軸に  
平和、共生、多様性について考える本を集めています。  
世界のどこかで起きている出来事が、  
物語を通じて静かに心に届きます。  
その声に耳を傾けることで、  
新たな理解と想像が広がるかもしれません。

本リストでご紹介する本は個人・団体からご提供いただいた情報に基づいており、  
その内容については UNHCR 駐日事務所の組織の見解とは関連がありません。

また、UNHCR 駐日事務所として特定の本や著者などについて宣伝・推薦するものではありません。

## □ 難民の体験を知る（19冊）

ふるさとを離れなければならなかった人たちは、どんな思いで旅に出たのでしょうか。実際の声や記録、事実をもとにうまれた物語など、さまざまなかたちの「難民の体験」にふれてみませんか？



### 明日をさがす旅 故郷を追われた子どもたち

[作] アラン・グラツ [訳] さくまゆみこ／福音館書店

1939年にナチの迫害から逃れてドイツから船でキューバに向かったヨーゼフ、1994年に父親が逮捕されそうになりキューバからボートでアメリカに向かったイサベル、2015年に空爆で家を失いシリアから陸路でヨーロッパへ向かったマフムード。歴史的事実にもとづくこの作品では、時間も場所も状況もそれぞれ違う3人の難民の子どもの物語が、最後にはつながります。難民のことを「自分ごと」として感じるために、ぜひ読んでください。

〈紹介〉 さくまゆみこ（翻訳家）

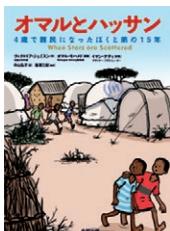


### アレッポのキャットマン

[著] カリーム・シャムシ・バシャ [絵] 清水裕子 [訳] 安田菜津紀／あかね書房

この美しいシンプルな絵本は、戦火に包まれたアレッポで、モハマド・アラー・アルジャリールが見捨てられた猫たちを世話する姿を描いています。思いやりと優しさの力を示しており、若い読者にぴったりです。イラストは、鮮やかなディテールで物語を生き生きと表現しています。この本は、子どもと大人に好奇心をかきたて、将来的により複雑な話題を探求するきっかけを与えてくれます。心温まるメッセージと美しいアートワークが特徴のこの本を非常にお勧めします。

〈紹介〉 スサン（出身国：シリア、博士課程（国際関係学）、EmPATHy 初代共同代表、Japan Bridge 運営委員会メンバー、パスウェイズ・ジャパン プロジェクトオフィサー）



### オマルとハッサン：4歳で難民になったぼくと弟の15年

[作] ヴィクトリア・ジェミスン [原案] オマル・モハメド [絵] イマン・ゲディ [訳] 中山弘子  
[監修] 滝澤三郎／合同出版

故郷ソマリアから弟のハッサンと逃げてきたオマルが、ケニアのダーバップ難民キャンプで多感な少年時代を生き抜いた記録。優しいタッチの絵とともに難民たちの心情が胸に迫る1冊。発達障害のある弟の面倒を見ずに学校に行っていいのか悩み、勉強することで空腹に耐え、学校の長期休暇は何もすることができないから嫌いと言うオマル。彼の半生に触れ、同じ時を生きる難民たちに寄り添う一步を。原題『When Stars are Scattered』

〈紹介〉 特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパン



### 風がはこんだ物語

[著] ジル・ルイス [絵] ジョー・ウィーヴァー [訳] さくまゆみこ／あすなろ書房

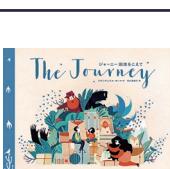


### コンゴから日本へのいばらの道のり：内戦の地獄から日本への亡命

[著] シャルル・イエンデムブンガ [訳] 木森隆／Independently published

著者はキンシャサに生まれ、あらゆる暴虐の蔓延るコンゴ民主共和国大統領モブツの独裁時代、1996年からの内戦の渦中で人権擁護活動を続ける。それ故、自身の生命を脅かされ、囮らずも未知の国、日本へ亡命。しかし、寧ろ苦難は日本に来てから更に十数年も続くのであった。それでも著者は日本で零点数%の『認定難民』とされた稀有で『幸運な』例。時代は20年以上前だが、我が国の難民を巡る状況は何も変わっていない。

〈紹介〉 NPO法人 難民自立支援ネットワーク（略称REN）



### ジャーニー 国境をこえて

[作] フランチェスカ・サンナ [訳] 青山真知子／きじとら出版

制作にあたっては、「移住」について広く捉え、歴史文書を読んだり、様々な移住の体験を人に聞いたりすることからはじめました。『ジャーニー』はこうした異なる物語をもとに、国境を越えて移動する際の多くの障壁と普遍性を表現しました。世界中の誰もが安全に暮らす権利をもつてることについて、理解を広めたいと思いました。続編の『ひみつのピクビク』では、新しい環境で挑戦するときの恐れや不安について描いています。

〈紹介〉 フランチェスカ・サンナ（作家）



### シリアからきたバレリーナ

[作] キャサリン・ブルートン [訳] 尾崎愛子 [絵] 平澤朋子／偕成社

タイトルを見て「シリアにバレエ教室ってあったの？」と驚かれた方もいらっしゃるかもしれません。この本は「私たちと変わらない人たち」が戦争に巻き込まれ、誰しもが難民になる可能性があることに気付かせてくれます。辛い話も多いですが、人との出会いで希望を取り戻していくストーリーに是非ふれてください。そして、戦争前のシリアってどんな場所で、どんな暮らしをしていたのかについても調べていただけたら幸いです。

〈紹介〉 Piece of Syria



### シリア震える橋を渡って——人々は語る

[著] ウェンディ・パールマン [訳] 安田菜津紀 [訳] 佐藤慧／岩波書店

シリアの民衆蜂起、武力紛争、難民危機について、私たちシリア人が何を間違えたのか、どうすればよかったのかを上から目線で語る多くの本とは異なり、この作品はシリア人自身の物語とその声に焦点を当てています。シリア危機を生き延びた人、活動家、難民、移動を強いられた人々の個人的な体験を通じて、シリアの現実を伝えています。シリア危機を生き延びた一人として、この本がシリアの状況を理解するための繊細な視点を提供してくれることに感謝しています。

〈紹介〉 マスリ（出身国：シリア、RHEP学生（博士課程））



### 世界の難民の子どもたち 第1巻～5巻

[監修] 難民を助ける会 [作] アンディ・グリン／ゆまに書房

アフガニスタン、イラン、エリトリア、ジンバブエ、ユーラシアの5つの国や地域の子どもたちが、自国を去らざるを得なかつた背景、苦しみ、決意、希望などを、子どもたち自身のことばで綴つた本当のお話です。英国アカデミー賞を受賞したBBC（英国放送協会）制作のアニメを絵本化し、日本語版は、特定非営利活動法人 難民を助ける会 [AAR Japan] が監修しました。小学校低学年でも読めるよう、漢字には読み仮名が付いています。

〈紹介〉 特定非営利活動法人 難民を助ける会 [AAR Japan]



### 難民選手団 オリンピックを目指した7人のストーリー

[文] 杉田七重 [監修] 国連UNHCR協会 [絵] ちーこ／角川つばさ文庫



### 難民になったねこ クンクーシュ

[文] マイン・ヴェンチューラ [絵] ベディ・グオ [監修] ヤズミン・サイキア [訳] 中井はるの／かもがわ出版

これは本当にあったお話です。表紙の猫は、かわいいですよね。わたしの猫にそっくりです。本を出すにあたり、猫のクンクーシュを助けたボランティアの方たちを取材して翻訳しました。人のやさしさは、必ずつぎのやさしさへつながる、世界を動かすのだなと思いました。難民には人だけでなく共に暮らしてきたペットも含みます。だれもが安心して暮らせる世の中になればと心から願いながら言葉をつむぎました。ぜひ読んでください。

〈紹介〉 中井はるの（翻訳家）



### にじいろのペンダント

[作] 陳天璽 [作] 由美村嬉々 [絵] なかいかおり [協力] 無国籍ネットワークユース／大月書店

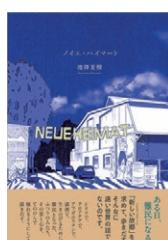


### 人間の土地へ

[著] 小松由佳／集英社インターナショナル

世界第2の高峰K2に日本人女性として初登頂した小松由佳さんが、次の旅先として選んだのがシリア。その旅から生まれた彼女の視点は、とても新鮮で感動的でした。シリア人のアイデンティティの本質を理解した描写の数々。そのなかには、シリア人の僕自身が気づいていなかったこともあります。故郷とは物理的な“場所”ではなく、一緒に過ごす人々の存在があってこそ定義されるもの。僕が知ってほしいシリアについての真実が詰まった一冊です。

〈紹介〉 アナス・ヒジャゼイ（出身国：シリア、アクセントチャ株式会社、EmPATHy 初代共同代表、Japan Bridge 代表）



### ノイエ・ハイマート

[著] 池澤夏樹／新潮社

初めて彼らに会ったのはタイとカンボジア国境にある UNHCR の難民キャンプだった。ポルポトの迫害を逃れて安住の地に着いた人々。それからずっと彼らのことを気にしていた。2025 年には取材のためにギリシャとドイツを行った。見たこと、聞いたこと、読んだこと、それらを一つの物語ではなく、詩や、短篇小説や、他人の作の引用や、昔の自作の要約など、さまざまな形で書いて一冊にまとめた。それがいちばんふさわしい気がしたのだ。

〈紹介〉 池澤夏樹（作家）

走れ、ロヒンギャよ、走れ：難民キャンプ生活、人身売買を生き抜いた私の物語

[著] ジアウル・ラフマン [訳] 出水麻野 / Independently published

No Image

この本『走れ、ロヒンギャよ、走れ』は、迫害を逃れ、アイデンティティを求めるすべてのロヒンギャの物語を反映しています。ロヒンギャの人々が普通の生活を求めて、続ける終わりなき旅が描かれています。この本は、私の両親が歩んだ旅、そして私自身の旅を思い出させます。この本を通じて、多くの人々にロヒンギャの現実を知ってほしいと願っています。

This book, 'Run, Rohingya, Run', reflects the story of every Rohingya fleeing persecution and seeking an identity. It depicts the endless journey of the Rohingya people to be recognized and to settle down with a normal life. It reminds me of the journey my parents took and the journey I undertook. I hope many people will learn about the Rohingya reality through this book.

○紹介 カディザ・ベゴム（出身国：ミャンマー（ロヒンギャ）、（株）Shared Digital Center アシスタントマネージャー、Harmony Sisters Network 創設者、2児の母）



バタフライ 17歳のシリア難民少女がリオ五輪で泳ぐまで

[著] ユスラ・マルディニ [著] ジョジー・ルブロンド [訳] 土屋京子 / 朝日新聞出版

UNHCR親善大使として僕の仲間の一人でもある、シリア出身のユスラ・マルディニさん。「難民選手団」の一員として、五輪の旗を掲げる彼女の姿を見た人は多いと思います。故郷のシリアで水泳の選手だった10代の少女が、紛争で故郷を逃れるために海を渡ることを決断し、途中に沈みかけたボートから海へ飛び込み、一晩中ボートを押し人々の命を救った——。年齢や性別、経験なんて関係ない。強い意志があれば、なんだってやり抜くことができる。彼女の勇気とその生き抜く力に、ぜひふれてみてほしい。

○紹介 MIYAVI（UNHCR 親善大使・アーティスト）



紛争・迫害の犠牲になる難民の子どもたち

[著] 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）[訳] 榎田理絵 / 合同出版

紛争や迫害により家族や住むところをなくし、心のよりどころを失ってしまった難民の子どもたちの心には、いったいどんな情景が広がっているのでしょうか？この本では、難民の子どもたちが実際に描いた絵を、その言葉とともに紹介しています。難民のことを知識として知っていても、絵を見て、心で感じることで、はじめて見えてくる現実もあると思います。困難な中でも前を向き続ける子どもたちの力強い言葉にも注目してみてください。

○紹介 榎田理絵（翻訳家）



### ぼくたちのことをわすれないで 口ヒンギヤの男の子・ハールンのものがたり

[作] 由美村嬉々 [絵] 鈴木まもる／校成出版社

「世界で最も迫害された民族」と呼ばれる、ミャンマーの少数民族口ヒンギヤ。彼らは国籍を取り上げられ、2017年8月25日には痛ましいジェノサイド(虐殺)が起きました。それから7年、今も100万人が難民キャンプに閉じ込められています。その実情を知るうちに、私の中で「わすれないで」というメッセージが浮かび上がってきました。少年の瞳の奥の哀しみが、一人でも多くの人に伝わりますように……。

〈紹介〉 由美村嬉々(作家・編集者・絵本カタリスト)



### マイスマールランド

[著] 川和田恵真／講談社

## □ 子どもたちのまなざし (9冊)

紛争、そして故郷を追われることについて、子どもたちはどう感じていたのでしょうか。小さな声にそっと耳をかたむけることで、見えてくるものがあるかもしれません。



### おとうさんのちず

[作・絵] ユリ・シュルヴィツツ [訳] さくまゆみこ／あすなろ書房

戦争で家をなくした少年とその家族の物語。着の身着のまま、わずかな所持金で父親が買ったのは世界地図。その地図は少年にとって、安らぎ、知識、そして避難の手段となり、想像力、学ぶことの喜びにもつながりました。

幼いころ、私の両親も「地図」を贈ってくれました。難民の背景があるがゆえに、さまざまな困難もありましたが、暗い時代でも希望を持ち続けることができました。

世界中の難民の子どもたちに、みんなで「地図」を贈りませんか。きっと、希望につながる心の支えとなるはずです。

〈紹介〉 リアン(出身国:ミャンマー、早稲田大学修士課程、EmPATHy メンバー)



### きみは、ぼうけんか

[文] シャフルザード・シャフルジェルディー [絵] ガザル・ファトッラヒー [訳] 愛甲恵子／ブロンズ新社



### せかいいいちうつくしいぼくの村

[作・絵] 小林豊／ポプラ社

我々は皆難民の子孫である。

ヒトは地球という奇跡の環境で繁殖した。そして気候変動、寒冷化、疫禍、戦乱と、生存の危機に直面する度、難民化して生きのびてきたのだ。難民は摩擦も生むが、異文化や他の遺伝子との出会いは、ヒトの免疫力を一層高める効果を生み、現代人を存続させた。難民の問題は明日の人類が生き残るための鍵であり指針となり得る。

つまりこれは我々日本人の未来の話なのだ。

〈紹介〉 小林豊（画家・作家）



### ともだちのしるしだよ

[作] カレン・リン・ウィリアムズ [作] カードラ・モハメド [絵] ダグ・チェイカ [訳] 小林葵／岩崎書店



### なんみんってよばないで。

[著] ケイト・ミルナー [訳] 小寺敦子 [解説] 認定NPO法人難民支援協会／合同出版



### パパがしげみになった日

[作] ヨーケ・ファン・レーウェン [訳] 野坂悦子 [絵] 岡本よしろう／ほるぷ出版

あたしのパパはお菓子屋さん。でも戦争に行って、“しげみ”に変装するんだって。あたしはバスでひとり、となりの国に住むママのところへ行くことになったけど、“国境”ってものがあるって、なんだか思ったより大変みたい……。ちょっととぼけた女の子、トダが語る戦争は、こんなのってへんだよ、と思わされる出来事ばかり。戦争の本は怖くてイヤと感じる子にも、難民ってなんだろう？と考える子にも、おすすめできる一冊です。

〈紹介〉 野坂悦子 (翻訳家・作家)



### ひみつのビクビク

[作] フランチェスカ・サンナ [訳] なかがわちひろ／あかつき教育図書



### プラディとトマ ふたりのおとこのこ ふたつの国 それぞれの目にうつるもの

[文] シャルロット・ベリエール [絵] フィリップ・ド・ケメテール [訳] ふしみみさを／BL出版

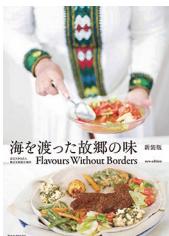


### モナのとり

[作] サンドラ・ポワロ＝シェリフ [訳] 水橋はな／新日本出版社

## □ 多文化・共生を考える（10冊）

いろんな国、いろんな文化の人たちと出会ったとき、どんなふうに心を通わせていくのでしょうか。ちがいを楽しみ、ともに生きるヒントが見つかる本たちです。

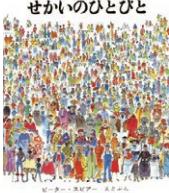


### 海を渡った故郷の味 新装版

[著] 認定NPO法人 難民支援協会／トゥーヴァージンズ

日本にいる難民の方から教えてもらった故郷の料理を集めたレシピ本。アジア、中東、アフリカの15の国・地域から45のレシピが掲載されています。各レシピには難民の方から聞いた料理にまつわるエピソードや作り方のコツなどを書いたコラムもあり、読み物としても楽しめます。難民について知らない方への贈り物にもぜひ。

○ 紹介 認定NPO法人 難民支援協会



### せかいのひとひと

[作・絵] ピーター・スピアー [訳] 松川真弓／評論社



### それはわたしが外国人だから? — 日本の入管で起こっていること

[著] 安田菜津紀 [絵・文] 金井真紀／ハウレーカ



### てをつなぐ

[作・絵] 鈴木まもる／金の星社



### にほんでいきる——外国からきた子どもたち

[編] 每日新聞取材班／明石書店



### ねえさんの青いヒジャブ

[作] イブティハージ・ムハンマド、S・K・アリ [絵] ハテム・アリ [訳] 野坂悦子／BL出版



### ふるさとはウクライナ

[文] 望月芳子 [絵] ミヤザキケンスケ／ナイデル

ウクライナに平和の壁画を残すために、2017年UNHCRと協力して「てぶくろの絵」を制作しました。1ヶ月の滞在期間中マリウポリの人たちは温かく私を受け入れてくれました。しかし2022年のロシアの軍事侵攻によって壁画は破壊され、ある友人は家を焼かれて命からがら日本まで避難してきました。彼女から話を聞いて初めて戦争を身近に感じました。あれから3年、いまだ戦争は終わりません。いつかまたウクライナに平和の壁画を描きたいです。

○紹介 ミヤザキケンスケ (アーティスト)



### やさしい猫

[著] 中島京子／中央公論新社

日本で暮らす主人公の少女は母とスリランカから来た「クマさん」と幸せに生活していたが、クマさんの滞在許可を巡り家族は引き離されてしまう。家族で再びともに暮らすために主人公は母と動き出す。日本の入管とのやりとりをメインに10代の少女の視点で物語は綴られる。物語の中では難民の両親を持つ少年との出会いも。紛争や災害を逃れて難民となった人たちが避難先でも困難に直面するという現実がストレートに心に迫ってくる。

○紹介 認定NPO法人 REALs (リアルズ)

わかりあえないことから  
コミュニケーション能力とは何か  
平田オリザ



### わかりあえないことから——コミュニケーション能力とは何か

[著] 平田オリザ／講談社

もう十数年にわたって「グローバル・コミュニケーション・スキル」=異文化理解能力の獲得が教育現場で叫ばれています。いささかヒステリックに。

本書は、コミュニケーション教育の最前線に身を置きながら、そこで感じた違和感。なぜ、日本で、異文化理解が進まないのか？何か前提が間違っているのではないかといった感覚を、演劇というフィールドを通して考えた者です。

コミュニケーション、コミュニケーションと言うけれど、何をそんなにわかり合いたいのか。そんな疑問をお持ちの方に、お読みいただけると幸いです。

○紹介 平田オリザ（劇作家・演出家）

No Image

### Le grand défilé des animaux

[作・絵] Julie Colombet／CASTERMAN

この絵本とは、僕が1993年に難民として来日したときに暮らしていた板橋区にある小さなフランス語専門店で出会いました。ページをめくるごとにさまざまな動物たちが登場し、羽根があっても飛べない鳥たちの存在や、敵から逃れるために巣穴を掘り、地下に身を潜める動物たちの存在、高い木の上に登り避難する動物たちの存在を教えてくれます。多種多様な動物達の壮大な生命の歩みをパレードと表現した美しくも勇ましいメッセージを持つ絵本です。僕はこの絵本を通して幼い息子に、多様性と生命の尊さ、生きる力強さを教えています。

○紹介 渋谷ザニー（ファッショントレーナー）

## □ 社会と難民（13冊）

ニュースで聞く「難民」って、私たちの社会とどう関係しているのでしょうか。支える人や、制度のしくみにふれながら、私たちにできることをいっしょに考えてみませんか？



### いっしょに考える難民の支援——日本に暮らす「隣人」と出会う

[編著] 森恭子 [編著] 南野奈津子／明石書店

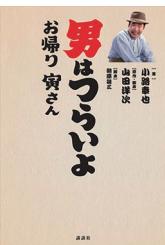
移民や難民ってだれのこと？

[著]マイケル・ローゼン [著]アンネマリー・ヤング [訳]小島亜佳莉／創元社



男はつらいよ お帰り寅さん

[著]小路幸也 [原作・その他]山田洋次 [その他]朝原雄三／講談社



本作は寅さんの甥である満男と初恋の人の泉の再会から物語が始まります。

たまたま日本へ仕事で来て、滞在期間も限られている泉というキャラクターをつくる上でどういう仕事がいいか？を山田洋次監督が考えられ、国連の人道機関であるUNHCRという案が出てきました。危険もあり、しかし大切な、難民問題という仕事に真剣に携わっているような人であってほしい、という想いからです。

この小説とともに映画もお楽しみいただけますと幸いです。

○紹介 阿部雅人(松竹株式会社)



社会に良いことをする ユニクロ柳井正に学ぶサステナビリティ

[著]北沢みさ／プレジデント社



第七の男

[著]ジョン・バージャー [写真] ジャン・モア [訳]金聖源 [訳]若林恵／黒鳥社

無力だけど、写真にできることが、まだ少しあると思わされた

○紹介 ホンマタカシ(写真家)



旅するわたしたち On the Move

[作]ロマナ・ロマニーシン [作]アンドリー・レシヴ [訳]広松由希子／プロンズ新社

人道と開発をつなぐ  
アフリカにおける新しい難民支援のかたち

花谷 厚



## 人道と開発をつなぐ アフリカにおける新しい難民支援のかたち

[著] 花谷厚／佐伯コミュニケーションズ

現在、世界の難民の約4分の3は開発途上国で受け入れられています。難民の人たちが苦境にあるのはもちろんですが、難民受入れ国も決して豊かではありません。JICAプロジェクトヒストリーとして出版されたこの本は、アフリカの低所得国の一つであるウガンダが150万人もの難民を受け入れ、難民との共生を図ろうとしていること、そして日本が同国の難民受入れを支援するに至った経緯と協力の概要について、一人のJICA職員としての経験に基づき伝えます。

〈紹介〉 花谷厚 (JICA専門家)

世界の難民を  
たすける  
30の方法



## 世界の難民をたすける30の方法

[編・著] 滝澤三郎／合同出版



## 難民に希望の光を 真の国際人緒方貞子の生き方

[著] 中村恵／平凡社



## 難民の? (ハテナ) がわかる本

[著] 木下理仁／太郎次郎社エディタス



## ボーダー 移民と難民

[著] 佐々涼子／集英社インターナショナル



無国籍と複数国籍 あなたは「ナニジン」ですか？

[著] 陳天璽／光文社



わたしたちの権利の物語 難民と祖国

[文] ルイーズ・スピルズベリー [絵] トビー・ニューサム [日本語版監修] 杉木志帆 [訳] くまがいじゅんこ／文研出版

「難民ってなに？」「どんな人たちなの？」と疑問におもったときにお勧めしたい一冊です。きっと、「難民」や「支援」に対する考えが少し変わるものではないでしょうか。

現在、ジャパン・プラットフォームは中東、アフリカ、アジア、ウクライナなどで、難民や難民を受け入れる地域の人々の支援を行っています。「現地の人々に寄り添い」、「本当に必要とされる支援を届ける」ことは、支援をする上で私たちが大切にしていることです。

〈紹介〉 特定非営利活動法人 ジャパン・プラットフォーム

## □ 平和と人権（11冊）

「すべての人が大切にされる社会」とはどんな社会でしょうか？平和や人の権利をやさしく伝えるとともに、現実の厳しさも突きつける作品を集めました。考え、行動するきっかけになる本たちです。



あさになつたのでまどをあけますよ

[作・絵] 荒井良二／偕成社



明日の国

[作] パム・ミニヨス・ライアン [訳] 中野怜奈／静山社



## 君のためなら千回でも

[著] カーレド・ホッセイニ [訳] 佐藤耕士／早川書房

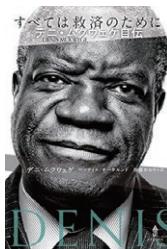


## 子どもの十字軍

[文] ベルトルト・ブレヒト [訳・絵] はらだたけひで／ひだまり舎

2022年2月、ロシア軍がウクライナに侵攻し、そのときに私はこの詩に出会いました。ブレヒトの詩は、第二次世界大戦における子どもたちの運命を描いたものですが、私はこの詩に、ウクライナやパレスチナ、シリア、スーダンなど、今日の戦争で逃げ惑う子どもたちの姿が重なりました。そして戦争が世界を覆う今日、この詩を語り継がなければならぬと思いました。皆さんも絵の子どもたちにご自身の身近な子どもを重ねて読んでいただければと願っています。

○紹介 はらだたけひで (作家)



## すべては救済のために——デニ・ムクウェゲ自伝

[著] デニ・ムクウェゲ [訳] 加藤かおり／あすなろ書房



## 世界じゅうの女の子のための日

[文] ジェシカ・ハンフリーズ [文] ロナ・アンブローズ [絵] シモーネ・シン [訳・解説] 国際NGO プラン・インターナショナル／大月書店

大月書店出版の絵本「世界じゅうの女の子のための日 国際ガールズ・デーの本」には、異なる国に暮らす9人の女の子たちが登場します。それぞれが直面するジェンダーに基づく暴力や不平等に対し声をあげ、乗り越えていく前向きな姿が描かれています。登場人物のうちの一人ザラは、戦争のために故郷を離れて難民キャンプで暮らしています。過酷な状況のなかでも笑顔を忘れず希望を失わずに懸命に生きる姿は読み手の胸を強く打ちます。

○紹介 国際NGO プラン・インターナショナル



### せんそうがやってきた日

[作] ニコラ・デイビス [絵] レベッカ・コップ [訳] 長友恵子／鈴木出版

ひとりぼっちで避難している子どもの難民がおおぜいいることを知っていますか？戦争や迫害などで難民になり、その上、親や保護者をなくした子どもたちのことです。そんな子どもたちにも、あなたと同じように未来があります。大人になったら……と、夢を見ます。避難所には学校があり、子どもたちの夢がかなうよう、支援しています。安全な日本にいるわたしたちができる支援とはなんでしょうか？この絵本を読んだことが、あなたの支援の第一歩になります。

〈紹介〉 長友恵子（翻訳家）



### みんなたいせつ 世界人権宣言の絵本

[編・訳] 東菜奈 [写真] 渋谷敦志／岩崎書店

世界人権宣言は、戦争を二度と繰り返さないために、まず全世界に通じる基本的人権を尊重するところから始めようと、1948年に生まれました。この宣言自体には法的強制力はないものの、そこで明確にされた理念は、今ある多くの憲法や法律、人権条約に組み入れられています。みんなたいせつな存在。子どもは保護の対象ではなく、自分で権利を行使できる主体であることを子ども自身に知ってほしい。そんな想いからつくった絵本です。

〈紹介〉 渋谷敦志（フォトジャーナリスト）

### ルーツ

[著] アレックス・ヘイリー [共訳] 安岡章太郎・松田銑／社会思想社

No Image

### 私の夢とWCRP——カンボジアから未来へ

[著] ノウン・ヴァンナック／Independently published

10歳で難民となった少年が、難民キャンプでWCRPから食料や教材などの支援を受けて人生の光を見いだした経験や、プロンペンで日本語ガイドを務めたときに起こったWCRPとの奇跡の再会、WCRPの招聘を受けて来日した際のエピソードなどが記述されている。「今なお貧困に苦しむカンボジアの人々に平和や幸せをもたらすことが夢」著者の元カンボジア難民ノウン・ヴァンナック（通称：ノーム）氏は本書がその一助になればと願っている。

〈紹介〉 (公財) WCRP 日本委員会



THE LAST GIRL ーイスラム国に囚われ、闘い続ける女性の物語

[著] ナディア・ムラド [訳] 吉井智津／東洋館出版社